

【エッセイ】

Happy Agingの中で思う、最近気になる事象

山 中 一 郎

1：どこに消えたのか非行少年

この処、「非行・非行少年」という言葉を殆んど聞かなくなった気がする。「暴走族」のような「存在」も「番長」と言う言葉も久しく聞いていない。あながち、私が、歳をとり、歩行に難渋、殆ど外出する機会がなくなったので、見る機会が減ったと言うことでもなさそうである。実際に、彼らの話も姿も見かけなくなったのだ。繁華街で、夕方ごろから「たむろし始める若者」たちの姿も、まず見かける機会が減ったように感じる。彼らは、「ダサく」、どう見ても「スマート」で「洗練されている」とは言えない。

代わって、今の「若者」は、総じて「スマート」で「クレバー」に見える。以前の若者は、一般的に言って、どこか「あく」が強く、良きにせよ、悪しきにせよ、際立って個性を主張するところがあったように思う。今でも一部の業界には「敢えて悪乗りするような若者、時に中高年」も居ないわけではない。しかし、なかには「人工知能」にも負けないほどの優れた知能と行動とを兼ね備えた「若者」もいる。それが変な「大人たちの商業主義に影響されなければ」素晴らしい事であると言えるだろう。一部の大人たちは「きわめて老獪」で「ずる賢い」ところがある。今の若い世代の多くは、総じて礼儀正しく、行いも限度をわきまえ、利口そうである。実際にそうなのだろうと思う。小学生もよく「PC」を使いこなし、われわれの頃より、数字にも、外国語にも強そうである。やることなすことに万事そつがない。これでは到底かなわないと思う。と同時

に、まだこの国は捨てたものではないとも思う。安心して、われわれが、一時、「滅亡させ、絶望の淵に追い込んだ」この国の未来を託せると信じたりしている。

広島から上京した頃の私は、幼く、地方出身の田舎者で「どんくさく」、話す言葉も「田舎弁」丸出しでは友達も出来なかった。方言とアクセントの違いを、私には自ら知る由もなくと言うか、違っているという自覚すらなかった。とりわけ時代が昭和の初めでは、品川区も南品川、大井町界限は荏原郡の名残が多く、至る所に「原っぱ」という500坪以上もある空き地も数多くあった。そこは子供たちにとっての格好な「ごっこ遊び」の場所でもあった。子供たちのなかには「鼻たれ小僧」が多かったように思う。しかも、「青っぱな」の子供が多かった。服装も、洋服、和服と一様でなく、肘とか脛に継ぎの当たった洋服を着ている子供も多く、女性も丸髷、島田の女性が多かった。私の母も三十代前後であったが、まだ島田を結っていた。洋服より着物で、私も家にいるときは殆ど着物で過ごしていた。

*「原っぱ」については、永井荷風「日和下駄」に記述がある。

近所の医者とか、役人、勤め人、高級軍人のように「電話」のある家庭の子供たちは、ハイカラな洋服姿で、私たちとは違う少し遠くても、古く歴史（由緒）のある小学校に通っていた。理由は、当時、府立中学の受験は「内申書」と「面接」で合格が決まっていたようだ。学区制でもあり、予めこれまでの実績によって推薦枠がそれぞれの学区内の小学校に内示されていたようである。「内申書」には通知表の成績が記入され、「合格か否か」はただその成績と簡単な面接のみで判断されたようである。従って、ときには内申書の「改ざん」も行われたことがあったようである。昭和10年、全国的に「内申書改ざんによる汚職事件」が摘発され、自殺する教職員（校長等）が問題になった。私が、中

学を受験したのはまさにこの頃であった。府立中学に入学した直後に、各自、通知表を持ってくるように言われた。その時は、なぜこんなことをされるのかと思ったが、格別不審にも思わなかった。後に当時の深刻かつ「全国的組織的な洗職事件」の内容を知った。「洗職事件」など、割に合わない、不名誉な犯罪であるのに、なぜ行うのであり、後を絶たないのであろうか。

昭和18年、東京府が、東京都に変わり、「区」も統合、合併がなされた。当時は、東京の人口が急激に増加、郊外にも住宅地が拡張され、東京も大きく変わりつつある時代であった。青少年の人口も増加し、中等学校への進学率も高まり、男女の中等学校増設の必要性が高まった。東京府は、昭和10年以降、増設を目指し、男女合わせ20校近くの府立中等学校を設立した。しかし、急速な東京の人口増は減少することなく、この後も続いて行く。昭和20年には「敗戦」を迎えるが、人口は増え続ける。教育制度もアメリカの「教育使節団」の来日などによって大きく変わることになる。私の中学時代は、まさにその「学校制度改革」の転換点であった。「渦中の人」である私はまさに「混沌」のなかにあったと言ってよい。

*推薦枠は、私の学区は男性は府立一中（日比谷高校）、八中（小山台高校）、十五中（青山高校）が普通科中学で、一中、八中がそれぞれ一名、十五中が四名であった。その頃は、クラスは約五十名で一学年5組、半数が女性であったので、3組は男女半々の通称「男女組」と言われていた。私は3年生まで「男女組」であった。4年から男女が別々となる。6年では、一学年の約半数が中学進学、後の半数は、高等小学校の高等科で2年を過ごすことになる。高等科は義務教育ではなく、そのまま尋常小学校卒のまま働く子供たちもいた。府立一中は、通称「全国枠」と言われ、日本全国から学区内に縁故者を「寄留先」にして入学する者も多かったという。そこから第一高等学校に入学するのがエリートのコースと言われていたようである。どこにも「抜け道」はあるようだ。当時の成績は相対評価ではなく、「甲乙丙丁戊」と言う「絶対評価（?）」であった。全部

Happy Agingの中で思う、最近気になる事象

の成績が「甲」の者もいたようである。私は、6年間、「全甲」とは行かず、「優等賞」は貰えなかったが、何故か「6年間の皆勤賞」をただ一人貰った。何故か不思議であった。とにかく、「くそ真面目、融通の利かない、ダサイ」子供であったようだ。

土地柄（東京府東京市－荏原郡－品川区）のせいかもしれないが、衛生状態も今に比べると随分と悪かった。便所（トイレ）も、殆どの家が「汲み取り式」で、夜には2ワットくらいの裸電灯が点いていた。昼も夜も暗い場所であった。当時は全体に衛生状態も悪く「結核を患った」若者も多く、私も痩せて顔色も青白く、ひよろひよろした少年であった。大学4年の頃、私も結核を患うことになる。このような仲間たちと、「尋常小学校」で子供時代を過ごしていたのである。1か月に4日位、近所の小さな神社で縁日が開かれていた。縁日には「夜店」が開かれ、一応「こ店～コミセ」「高物～植木類」まで揃っており、バナナの叩き売りまでであった。近所に住む人達で賑わっていた。当時の人たちには楽しみの場所であった。街角には交番もあり、時折、警察署に拘引される「囚人」が腰縄、手錠をされ、編み笠で顔を隠された姿で立っているのを見かけたこともある。本署に連行される前の姿であった。

*当然のこと、繁華な街中では「不良」「不良予備軍」（準不良少年）といった若者が群れをつくって歩いていた。小学生くらいまでは相手にされる事は殆ど無かったが、小学生でも高学年だと目を付けられる者もいたようだ。「腕時計」とか「小遣い」をもっているのだと「恐喝－喝上げ」されたりした子も居たようだ。また「中学生」など、わざと大人びた言動をする連中もいた。新宿の「ムーランルージュ」に行ったことを自慢げに話す先輩もいた。当時、私にはそこがどういう場所か全く知らなかった。彼らは、「軟派」であり、ときにわれわれ下級生を気に入らないからと言って「殴ったり」したものだ。「硬派」にも変わったりする。「殴打」は、日常的に行われていた。先輩からの殴打、教師からの殴打は、仕方が無いと、半ば諦めてもいた。そう言う「時代・世相」であっ

た。「鉄拳制裁」と言う言葉は日常用語であった。私も、小学生、中学生のときよく殴られた。多くは、教員からの「連帯責任」と言う事由による殴打である。サディストかと思うほどの行為であった。小中学生の頃の、未だ田舎者の私には「盛り場」（浅草、新宿等）は「怖い、恐ろしい」（魔物でも住んでいるかのような）場所でもあった。銀座の夜店は道路を挟んで隔日に露店が立った。此の露店を見ながらの散歩を「銀ブラ」といった。東京全土から人が集まって繁盛したものである。家族で出かけたものである。東京人にとって数少ない娯楽の一つであった。

冒頭、私は、このところ「非行」と言う言葉を聞かなくなったと述べた。同様に「不良」と言う言葉も聞かなくなった。これらの言葉は、昭和の頃までは、ある種の青少年たちを意味する慣用語であった。彼らは、一見してどのような「見なり、行為・手口、服装」を好むか分かる「人」であり「集団」であった。昭和の時代を最後に、私の周りには殆んどと言ってよい程、見かけなくなった。何故なのだろうか、と思う。だが青少年の犯罪が無くなったわけでもなく、犯罪・非行の類が無くなったわけでもない。驚くような、今まで見たことも無いような犯罪が発生している。東京に住むまだ未成年の男性が、九州で親と娘を襲い、傷を負わせ、自分は「事故か自死」か分からないが死亡したと言う事件があった。加害者の少年と被害者の娘との関係は「スマートフォン」を通じてであり、直接の面識は無かったと言う。被害者の住居地も「スマホ」の位置情報で探したようだという。また自分の親兄弟を殺害するための予行演習に見ず知らずの親子づれを用意した刃物で刺したと言う女子中学生が居た。私に言わせれば、彼ら、彼女からは殺気などの異常な雰囲気は日常的には感じられず、ごくごく普通の少年少女だったであろうと思う。だからこそ唯々「脅威・驚異」である。では一見、普通に見えるこのような少年、少女たちの心に一体なにが起こっての行為であろうか。此れでは、おちおち街中を歩けない。「incredible and crazy」な世の中、物騒な世の中である。

Happy Agingの中で思う、最近気になる事象

*評論家たちは、このような時、感想を求められれば、なにかそれらしい「理屈」を探して言わざるを得ない。彼らは一応、専門家を称しているので「分かりません」とは言えない。とにかく、尤もらしく理屈を述べねばならない。何の事は無い。結局は何も述べてはいないことも多いのである。「専門用語」らしき言葉で、分かり切ったことを。とにかく、尤もらしく「肩書」で喋らねばならないのである。

「個人情報」は厳しく制限されているのに、「スマートフォン」で、いとも簡単に住居さえも探知できるとは。私は一応「携帯電話」(ガラ携)を持っているが、ほとんど「オフ」の状態である。全く使いこなせていない。だが今では、もっと複雑な機能をもった「スマホ」なしでは生活できない世の中になりつつあるようである。コロナ・ワクチンの接種も、買い物の支払いも全て「スマホ」で済んでしまう。現金など持ち歩く必要もないと言う。私は、昔から「電話恐怖症」であった。相手の顔、表情の変化を見ないと上手くコミュニケーションが出来ないのである。それに、昔の国際電話での忌まわしい記憶がPTSDとして残っているようだ。べらぼうに高い電話料に、驚いたものだ。そして、ある会社勤めの若い友人に掛けた時、背後にいる上司らしい人が「早く終わらせろ」と怒鳴る声を聞いて、慌てて電話をきった経験が忘れられない。現実の社会はこんなにも時間の管理が厳しいんだ、われわれのような「ぬるま湯に浸かった」かのような世界とは違うと感じた。機械音痴の私は、未だにパソコンも使いこなせていない。せいぜい、手紙と原稿を書くために使っているくらいである。書いた原稿を送るのが、又一苦勞である。われながら、呆れている。

以前、ある雑誌で(確か、「フロームB」と言う社内誌)であったように記憶している)「男時・女時・子時」と言う語句で、戦後日本の時代変遷を論じた文章があった。男時とは、男性型社会の時代、言うなれば重厚長大型産業が主流の社会(価値判断の基準は強弱)であり、女時とは、女性型社会、すなわち軽薄短小型産業の時代(価値観判断の基準は美醜)、子時とは、子供型社会の

時代（価値判断の基準は好きか嫌いか）、目線が低くなり、路上探索型社会と言う説明がされていたように思う。今は「何型の社会・時代」なのだろう。この「子時」では、何気ない路上の置物、マンフォールの蓋などが注目されるであろうと書いてあったが、事実そのようになった。玩具、よく喫茶店などに置かれていたマッチなども注目される時代になったようである。私も千点以上を収集したが、引っ越しの度に廃棄してしまった。意外と物欲も、収集癖もないのが、今思えば私の欠点であるようだ。ところで「子供型社会」の次はどのような社会・時代になるであろうかと考えた時もあった。「スマートフォン時代」、「ツイッターによる即時反応型社会」「思考停止型」「気分易変型社会」「アバター型・架空空間型社会」～「仮想空間・幻術型社会？」なども考えられる。とにかく、一息いれて相手の言動に反応すると言うよりも、即座に手が動いてしまうような社会の雰囲気なのである。「善か悪」かよりも、「好きか嫌いか」「イエスカノーか」を、瞬時にと言うか、衝動的に判断する。私には、怖すぎてついて行けない。考える暇など無い程、瞬時に判断し行動する。現今、見掛けるようになった「犯罪」もまた然りである。咄嗟に予期せぬ犯罪がなされる。逃げる暇もない。何時犯罪に巻き込まれるか分からない時代になった。「どちらかと言えば」と言った「ある種の曖昧さ」が許容されなくなると怖い気もする。この点についてはまたあとで述べる。

2：核家族・少子化が非行問題を変えた

家族の形態が変わり、昔風の家父長制度は消滅したようだ。親が高齢になり、身体的・精神的老化傾向が顕著になっても、そのままの暮らしを続けねばならないと言うことは大変な事だ。またそれを助けるには「肉体的健康」も必要である。ただ多くの高齢者は、この点で、かなり「自己」を過信しやすくもある。私は未だ大丈夫だ、私の判断、身体的反射能力は衰えてはいないと思っている。

私は、この点、東京で運転していた頃から、自分の健康に危惧を抱いていた。高血圧と心臓の持病である。だから72歳、広島に来てすぐ「運転免許証」を自主返納したことに後悔はなかった。無事故、無違反ではあったが、以前、外国で田園地帯を走っていた時、ついスピードを出して走っていた時の記憶が何故か、今もって忘れられずにいる。街中の狭い一本の下り坂道である。町は静かで、人通りは全く無かった。事故を起こしたわけでもなく、警察に何か注意されたわけでもない。ただ走っていただけなのに、この時、事故を起こさなくて良かった、何も起こらなくて良かったと言う思いだけである。外国の地方都市には、このような町が沢山あった。ただ昼は、人が皆無でも、夕方から夜になると、こんなにもと驚くほど、大人も子供も外で過ごすのである。

広島にも、中心部に大きな高層の市営住宅が建っている。白いので、一際目立つ。もう建てられて相当年月が経っているので老朽化していると思うのだが、そうは見えない。ただ「空室」も多いという。またここ20年、マンションの建設が目立つようになった。と言うことは「核家族」も見られるようになったと言うことであろう。広島は、川の多い街であり、高層建築には適していないのでは、と思っていたが。超高層のマンションが多数見られるようになった。しかし、緑も多く美しい街である。まさに「川と緑」の街である。車を運転できるなら、さぞかし楽しみは増えるだろうと思う。

しかし、また広島は、市街地は道が割合と平坦で自転車利用者の多い街である。前後に子供を2人乗せていたりする。雨の日、傘を片手に運転、後ろに子供を乗せていたりする。それを見ると、車を運転するのが怖くなる。90歳過ぎて、運転している人も多いうえだ。 「運転免許証」を返納した時も、所長さんが出てきて、「本当にいいのですか」と念を押されたし、知人からも広島には車で行ける場所が沢山あるのと言われてたりした。確かに、歩行に難渋し、

家内も高齢になると、近く買い物にいたり、投票に行くのにも困難になる。医者に行くにも、タクシーとなると、つつい考えてしまう。散歩もままならなくなると、つい「空想▶想像の世界」に逃避となる。

*余談であるが、大学受験の時、面接で趣味はと聞かれ、無趣味な私は即座に「空想することです」と答えたら、よほど気になったらしく「何を空想するの」と問われ、答えに窮して居たら「まあいいです」と言われホッとした。その時の面接官の一人がのちの指導教授になった。無教会派のクリスチャンで、奥様を亡くして以来、終生独身、「塔の研究」をライフワークとされていた。私は、大学院時代を通じ、食事に呼ばれたり、「原稿の添削」などで良くして頂いた。また、私たち大学院では3人の学生が同期でいたが、先生の誕生日会を開いて、いろいろな専門外のお話をお聞きしたりもした。戦後、GHQの意向で大学の担当科目の点検が行われ、カリキュラムにもいろいろと指導が入ったらしい。その際、担当が「社会心理学」と変えられたようであるが、本来は「哲学」であったように思う。出身大学が京都帝国大学文学部哲学科であったからである。私の「趣味」である「空想の世界に遊ぶは、その後、幾たびか問題を醸す」ことになる。用心して、あまり口にしないようにしているのだが、誤解も生む。クセジュ文庫にルイ・バックスが「幻想の美学」（窪田般弥訳）を書いている。その50頁に「幻想的なものが姿をみせるのは、特に幻想が最も貧弱にしか花開かないところに於いてである。と云うことを心に銘記すべきであろう。」(50頁)。私はさまざまな事を空想する。だが、よく「妄想」と誤解を生むこともあれば、有らぬ興味の対象となることもあるらしい。バックスはまた、最も難解とされる「シュールリアリスト」を「彼らは正常なのだ。なぜなら、彼らは、他の人間に語りかけるのだし、また、その人間たちに理解されるのだから。彼らは、自分たちよりもずっと前から存在し、《無意識》のどこかに隠れていた何かを発見したのではなく、人間の魂を、新しい感覚で豊かにしたのである。」(59頁) 私はただ、「空想」の世界を楽しんでいるのだ。空想には、「創造性」があるが「幻影、幻想」には「創造性」がないと思う。今は、満足に機能しない肢体にイラつく代わりに、ひたすら「記

憶の世界」を再生しているのだから。そこには生産性も何も存在しないかも知れない。だが、これが「変化、老化・老衰」を意味するのか、私には分からない。「時間の浪費」かも知れない。

こここのところ、街から、子供たちの姿が消えた。と言っていい程の街の「変貌」ぶりである。それと対照的に「高齢者」の姿が増えた。ここで、話題となるのは、およそ犯罪・非行とは関係なさそうな「少年」である。彼らの「容姿」から、それらしい雰囲気が感じられない、浮かばないのが気になる。犯罪とは、いかに考えようと、本来的に「割に合わない行為」である。また通常「犯意」を持つ、「その犯意を行為となす」には相当のエネルギーを必要とする。何故このように、直ぐ「死」と言うことを考えるのだろうか。まして、「死刑になりたい」などと考えるはならないと思う。どうして、そのような考えを抱く人が出てくるのだろうか。「大勢の人を殺して、死刑になりたい」と言う考えを抱く人が出てくるのだろうか。殆んどの「人」は「死にたい」と思って行動してはいない。誰も、死にたくはないだろう。

高齢者ともなると、いやでも「死」を考える。周りの友人、知人が亡くなると、いやでも次は我が身と考える。90歳を超えると、「死」は間近に迫った「事象」であり、「現実」である。後は「老衰か否か」であり、出来れば「安らかな死、幸せな老衰」を願うのが自然であろう。かつて言われた「疎外感」も、ほとんど感じることも無く過ごしている。周りから、人が一人減り、二人減りと言うことは、最近「日常的現象・毎日」であり、殊更問題視する現象でも無くなって来ているようだ。と言って、人が、多くの人が突然、消えるのは不自然である。尋常ではない。

私は、「死刑執行の場所」を、何か所か尋ねたことがある。自分からではない。

知人の犯罪学者に誘われたからである。決して、「見学」と言った場所ではない。アメリカ合衆国、カルフォルニア州にある「サンクエンチン連邦刑務所」の「ガス室」には、半円形の全面ガラス張り階段状の「見守り場所」があった。かつては被害者家族など関係者が最後の瞬間まで看取ったという。私は見たことを後悔している。見るべきではなかったと。この刑務所には、「絞首刑の刑場」も残されているが、いまは「死刑制度」は廃止されたと聞いている。

*「死も死刑も厳粛なものであり、決して興味の対象であってはならない」。私は死刑執行に立ち会った経験はない。だが大学生に対する講義で「死刑囚の心理状況」について語る際、私は、加賀乙彦氏の「宣告」の下巻、380-391頁を読んで聞かせたものだ。死刑執行までの状況が克明に描かれた作品であったからである。作者は医者であり、精神科医でもある。また東京の拘置所で、実在の「死刑囚」の精神鑑定人でもあった。死刑執行までの受刑者の内面を知る重要な手がかりであり、[死]と言うものが、どれほど重大なものかを知るうえで貴重な資料であると思ったからである。

戦後、核家族化が進み、少子化社会を迎えた今、人間の命の尊さについてもっと知るべきである。また折角授かった子供の命「は」尊重すべきであり、これを単なる「愛玩物」として扱うような考えは抱いてはならない。不妊治療に大変苦労する人も居る。しかし、子供を「愛玩物」としか見ない世相もときに垣間見えることに大いなる危惧を感じる。子供は、決して親の「愛玩」の対象ではない。子供たりとも、一個の「人格をもった存在」であり、リスペクトすべき存在、対象である。昨今、「キラキラ・ネーム」なる難解な名前が増えた。昭和の頃には、およそ想像だに出来なかった「命名」である。よく考えられたものだと感心するほど。親も知恵を絞って、この子の将来に幸あれと願って付けた名前であろう。皆、平等に、幸せに育ってもらいたいものである。

我々の世代・昭和初期のような、「戦争、飢餓」と言った経験はさせないで
もらいたい。「平和な世の中」で無事に幸多く、力強く育て欲しい。それで
なくとも小学生から競争の世界に臨み、大変であろうが、頑張っていて欲しい。そ
して、親の資力で将来の可能性まで決められる世の中であってはならない。子
供の幸せのために、多くの資金的援助もして欲しい。私も、返済義務のない奨
学金のお世話になって助かった体験があるからである。これが無かったら、当
時「結核」という病を抱えていた私の将来はどうなっていただろう。また「結
核の特効薬の相次ぐ発見と言う時代」にめぐり合わせた「僥倖」にも感謝し
たい。

いずれにしても「核家族化」と「少子化」が非行を減少させたと言えるだろ
う。子供に対する関係性が強くなるにつれて「反抗期」も何となく過ぎ去って
しまう。時には、親子が一体化してそのまま乗り越えてしまうこともあろう。
昭和の頃に見られた「流行」も見られず、「個性化」、時には「没個性化」で過
ごしてしまう。此れと言った「帰属意識」も、持つ必要性が余らないと「感じ」
ている。対する側も、「バワハラ」とされるのをおそれ、「個性化」としてそれ
を受け入れてしまう。一種の「美学」とも言える何かが存在するのであろう。
お互いを「尊重し合う」が「無関心」になる。「必要以上」は「干渉過剰」「干
渉過多」。だから、「お節介」は嫌がられると思いついでいる。要するに「ほど
ほど」か、「当たり障りなく」が「限度」となる。「決定的」は「タブー」であ
る。スマホでも、二者択一、好きか嫌い、イエスカノーかで判断する。尤も
「尊重」されるのは、「全面否定」「全面賛成」されることを嫌う「ほどほど」、
または「曖昧」さを残す「どちらかと言えばXX」と言う表現かもしれない。
昔から日本人の「微笑み」は、「Japanese smile」と他国の人からも関心をも
たれた。「悲しい時」にも、「困惑した時」にも「微笑む」のである。日本人特
有の表現法と言うより、生まれつき持っている「筋肉の動き(?)」なのか。
日本人がもつ生来的文化なのか。それとも「困ったときのコミュニケーション

-対応能力の不足]、「当惑の際のごまかし」か。理由は、いろいろ考えられるであろう。かつて小泉八雲が「日本人の面影」で書いているのを読んだ記憶がある。生まれてからの文化的雰囲気の中で醸成されたものと書かれていたと思うのだが、詳しい事は忘れてしまった。

*小泉八雲以外にも、仏像にみられる特有な口唇にも見られ、この「微笑み」は世界にもよく知られていることである。

核家族化、少子化、疎外と見てきたが、私は「近隣関係の在り方」もこの間、随分変わって来たように思う。此处で、代表的な事例を一つ上げよう。昭和52年に、三重県の津地方裁判所民事部に「損害賠償請求事件」として、隣人、鈴鹿市、国を被告として提起され、昭和58年2月25日に判決が下された、所謂「隣人訴訟」である。内容は「昭和52年5月8日の午後、当時3歳のY夫婦の子供Aと、4歳になるK夫妻の子供とがK夫妻の庭で遊んでいた。Y婦人が夕食の買い物に行くため、子供を迎えに行くときKの息子も一緒に行くと言いたいと言う。Kは、それなら自分たち夫婦もいる事だし。Yに息子をおいて行けと言う。Yはそれでは、「お願いします」（保護監督を委託）と言って（準委任契約成立）買い物に行った。Yが帰宅すると子供の姿が見えない。周辺を探すと、近所の農業用のため池でYの3歳の息子が溺死していたという事件である。何時も日常的に行き合いをしている家族同士の間であったが、Y夫妻はK夫妻を相手取って「民事損害賠償請求」をしたという事件である。請求は棄却されたが、かなり衝撃的なことであった。お隣同士の関係が、ここまでドライになったかという驚きである。これは、今ではよくある事例かも知れない。昭和の初期、それ以前に見られたような濃密とも言える人間関係は確実に変わりつつあるのも確かである。とかく、出しゃばり、お節介は嫌われるようになった。

*日本で最初の「隣人訴訟」と言われた。裁判であり、日本の「家族」の在り方、隣人との関係性をみなおす契機となった。「核家族化」の移行を示す事象とも云われた。重要な裁判とされる。

3：偏見と非行・犯罪・暴力行為について

「いじめ」と言う行為は、私の少年時代にはよくあったし、今でもなくならない社会現象と言える。原因は、「差別」であると思う。「差別」は、あらゆるところに存在している。人類の存在するところには、必ず存在すると言ってよい。「差別を無くそう」と言いながら、人類は絶えず差別を作り出してきた。

戦争が終わり、欽定憲法が廃止されるまでの日本は、世界的にも差別社会の見本市のようであった。位階は天皇からの「社会的距離」(?)であり、また物理的距離でもあった。勲等も同様であった。身分制度について、今の人たちはせいぜい江戸時代の「士農工商」くらいまでしか知らないであろうが、ごく最近まで「戸籍謄本」には、「士族」「平民」と言う記載がされていた。「華族」があったかは知らない。見たことが無いので。しかし、自分の名前の斜め右上のところに「十五位」と書いていた人がいたのは知っている。でも「スマートフォン」で、用が足りるようになった今、戸籍簿を見ることも無くなったであろう。戦前には「華族制度」が存在した。「公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵」と言っても、今の人には分かるまい。明治政府によって制定された身分である。と同時に、様々な身分階級が制定された。政治家、官僚、軍人には「親任官、勅任官、奏任官、判任官」、その他「位階勲等」があつた。「正一位、従一位から、従八位」、勲位は「大勲位」から「勲十二等」(後に勲八等)までであり、それに付随し「経済的恩典」(?)があつた。しかし、このようなある種の「特権」とは無縁な人たちの方が多かった。

私は「戦後」の法律改正までは「平民」であった。此の身分は。終世、末代

までも変わらなかったはずである。貴族院（現在の参議院）はかつては華族と士族、多額納税者から選出された人たちによって構成されていた。身分による「差別」である。このような「栄典制度」は戦後廃止されるはずであったが、一部、強い保守層からの要求もあって部分的に残されることになる。「大勲位」なる位階も、やがて復活する。死んでしまえば、人はみな平等になるのだが、「名誉」をありがたく思う人も居るのであろう。「身分」による「差別」であり、「職業」による差別とも関連する。いま言う所の「セクハラ・パワハラ」とも関係があるとも思う。

「民族的差別」も非行と関係する。全く意図せずに、何時の間にか「hate-crime」に加担したりもする。一番嫌な事だがこの種の犯罪、非行に安易に加担してきたことも否定しえないと思う。「民族的優位性」は、最も忌むべきことだが、無くすことが一番難しいことかも知れない。反社会的と言われる組織、団体のなかにも多くの多民族の出身者がいる。そこにしか住む場所がないということは誰の責任なのだろうか。戦前、日本には朝鮮半島出身者が数多く在住していた、私の在学していた府立中等学校にも多数在学していたが、多くの人は性格的にも、学業の上でも優秀であった。またわれわれ以上に日本、日本文化を愛してくれていた。なかには職業的にも差別を受けていたにも関わらず、嫌な顔一つせず、われわれの問題点を取り上げ詰問したりもした。彼らの多くは帰国後、朝鮮戦争で亡くなったという。彼らは、戦後帰国する際、離日を泣くほど残念がっていた。いまでも、その時の情景が思い出される。東京府立第十五中学は、初代校長の性格を受け、戦時中にも関わらず、かなり「自由な雰囲気」があったようだ。その後、普通の進学校になってしまったのも時代の趨勢か。

だが、われわれは「差別化」が好きらしい。差別することで、得られるものもあるのであろう。「差別化」は、徐々に、静かに、進んでいるようである。敗戦で得た「自由平等」も「博愛」も失われつつあるようだ。残念なことである。

後記：コロナ・ウィルスで失ったHappy Aging

この歳になって「コロナ・ウィルス・パンデミック」を体験することになるとは思わなかった。しかも、余りにも身近で。今、宇宙から地球を俯瞰できる時代である。「コロナ」だけではない。地球それ自体までおかしくなった。今まで地球上で人類が観測した最高の高温地点は、アメリカ大陸、カルフォルニア州、デスバレーだと記憶していた。1913年に、摂氏56.7度を記録している。覚えやすいので記憶している。最近では、2020年8月16日、15時41分に摂氏54.4度、華氏になおせば130度である。今年も、日本で40度近い、時にはこの数値を超える気温が複数日、複数地点で記録された。昭和の頃は、夏に30度を超える日は有るか無いかであったように記憶している。日本の四季から、春と秋が無くなりつつある。全世界的に気候が大きく変動しつつある。私は「夏バテ」で、一日中、ぶらぶらと怠惰な毎日を過ごしている。皆は、どのようにして過ごしているのだろうかと思う。熱中症にならないように、冷房（エアコン）も適切に使えと「お上」は言う。だが使用料金を無料にするとは仰せでない。世の中、欺瞞と矛盾だらけである。

全てが変わりつつある。偏見も差別も無くし、戦争も無くし、お互いどうしたら平穏に暮らせるかを真摯に考えるべき時に来ていると思う。私も、平穏であるべき老後を「コロナ・パンデミック」で失った。友人でもあり、先輩でもあり、また私の心、精神の管理人でもあったK氏は、コロナで高熱を出し、ようやくICUから出て、私に電話。未だ苦しいと言いながら息も絶え絶えの電話。その後、間もなく息を引き取られた。苦しい息づかい、まだ耳元に残っている。20世紀を生き、21世紀を、希望の中で迎えたはずなのに、この様な世の中で亡くなられようとは。私の書いたエッセイにも、取り上げさせていただいた。また一人、「粹な人」がこの世から消え去った。嫌な「衝動的殺傷事件」が数多、

起きる中、クレバーな若者たちの世代に最後の望みを託したい。「コロナ・パンデミック現象」は、われわれの「社会的疎外感」を強めたのか、弱めたのか。おそらく「管理化され易い」国民性のようだから、強めたのかも知れない。今は、全ての事、「過ぎ去った日々」が頭の中をよぎる。

*強烈な思い出は、「日中戦争」、様々な事柄を吹き込まれ「真実」を、まだ知らないようだ。「敗戦」と「日本の軍需物資」の横流し。占領軍がアメリカ第一騎兵師団ときいて、東京は騎馬軍団で溢れると思った「無知」。中国での日本陸軍の騎兵師団が「馬」に乗っていたから、当然、アメリカもそうだろうと考えていた。来たのは、ジープと称する自動車軍団。未だに、日本の情報には疑問が残る。情報開示と言ったりするが、情報公開はまだまだである。またマスコミ、テレビは麻薬、覚醒剤のように、人の心を取り込んでしまう。危険である。誰とも、分け隔てなく付き合うことは大切と思いながら、実は私自身「偏見」の塊のように思う。自分自身が嫌になる。此の辺りで、最後としたい。果たしてそうなるかどうか。

参考文献

加賀乙彦著：(下) 新潮社 1983年

日本文科学会；社会的緊張の研究 有斐閣 昭和28年

津地方裁判所 昭和52年(ワ)第190号判決▶同54年(ワ)第147号判決 損害賠償請求事件(判決謄本取り寄せ)

リクルート・フロム・エー；FROM B 87-92；平成4年

ルイ・ボックス(久保田訳)；幻想の美学 白水社 1984年

現代風属研究会編；現代風俗 90 貧乏 リプロポート 1989年

戦後史大辞典；三省堂

TRANSIT 第51号；東京；江戸から未来へ 講談社 MOOK 2001年

山中一郎；東京犯罪空間；明治・大正・昭和 大陸書房 昭和61年